

和蘭陀外科免状（題簽）

—アルマンズ流阿蘭陀外科之濫觴—

岩 治 勇 一

アルマンズ流和蘭陀外科免状（卷子本）は拙者所蔵のものである。大野藩医林雲端（連子）が、享保十四年（一七二九）同藩の松田與三左衛門に授与、寛政二年（一七九〇）さらにその松田忠興より、同藩の藩医瀧波宗元に伝授したもので、「右之一流之書物拾八卷并ニ卷物二通云々」の一流の書物とこの卷物の外にあったと考えられる他の一通は現在ない。

安（阿）留曼須（寸）は、Armanus または Hermannus と考えられ時代的に問題のある人物であるが、かなり以前より外科の教授がオランダ人により行われていたようであるし、「阿蘭陀外科之濫觴」は拙者には極めて興味がある。なおオランダ外科医名の推定については、永積氏の「平戸オランダ商館日記」による時代的類推によった。御叱正を請うものである。

阿蘭陀外科免状（巻軸題簽）

阿蘭陀外科之濫觴

寛永二十年阿蘭陀国賈客渡韓韃国時暴風吹船瓢著本朝陸奥国南部浦山城守源重直収船中数十口献于江戸台命議之此年阿蘭陀加毘多牟延佐羅喜待命長崎微窮事實吳皆阿蘭陀国人也以数十口付加毘多牟延佐羅喜令送于本国慶安二年阿蘭陀国使者加毘多牟延論胡須至

謝之時獻擊石火箭者愈利安外科阿留曼須供至江戶朝大猷院大將軍明年九月十八日奉命辭江戶十月二十二日歸于長崎大將軍喜還境蔡枕令武士醫者等習彼藝術習外科者數人田村寂貞子其一也自是阿蘭陀外科行本朝蓋安留曼寸其外科權輿哉云安留曼寸日余自結髮專攻外治搜快諸家浩瀚汪洋不得適從而歸一蓋醫之為法也治內之難治外尤難內症不及于外也症而厚于內也內外合一論中華遠甜至矣盡矣不竣復贅祇德外治因無拋徑不中其肯綮洵滄海之遺珠也近代紅毛阿留曼寸偶挾外科靈術而懸壺於肥長崎市肆其僥方之殊效柳樹起瘡非人間世之所睹治怪來自龍宮如在蒼姬之世當列之天登塲醫既江都台聽命諸醫重驛為言獻之營中自是阿蘭陀外科行于本朝余亦寓止幸得親炙而與聞審其殺青而破割澗沆之術膏油煎煉之法與夫外國藥品之蘊全備矣嗣后須庭賓阿無須與利安加須波留等良醫代來益為之參究而有得救活之妙窮也云云吾子遊子門下潛心鑽研有數季所因探青囊中而耐焉匪其人而勿叨傳之儻有惰能而自負則其師之罪人也古曰醫者意也思精則得之其青於藍詎無望于他日哉勉旃慎旃

安留曼寸

吉永舛庵寂翁子

吉永舛雲寂翁子

田村舛意寂貞子

林雲端連子

「印」連子

享保拾四己酉曆

八月吉日

松田與三左衛門殿

右之一流之書物拾八卷并二卷物

二通相渡不殘傳授仕候也見在間敷者也

寬政二戌年正月吉日

瀧波宗元老江

松田與惣左衛門

忠興（花押）

(訳)

寛永二十年(一六四三)阿蘭陀国の賈客が韃靼国に渡るとき、暴風が吹き船(オランダ船ブレスケンス *Breskens* 号)が、本朝陸奥国の南部浦に飄著。山城守源重直が船中の数十口を収め江戸に献す。台命之を議し、この年阿蘭陀、加昆多牟(甲比丹)、延佐羅喜(Jan van Elseraq)命を長崎に待ち。事実を徴に窮め果して皆阿蘭陀国の人なり。数十口をもって加昆多牟、延佐羅喜に付し、本国に送らしむ。

慶安二年(一六四九)阿蘭陀国の使者加昆多牟梵論胡須(Anthony van Bronhons)至りてこれを謝すとき、撃石火箭者俞利安(Juliaen Schaedel)外科阿留曼須(Armanus または Hermanns であらうが、Hermanns Katz は、寛文元年(一六六一)の渡来、同二年九月二十二日帰帆のものであり、Hermanns Kerkenaar(永積氏平戸蘭館日誌)でなかるうか)供江戸に至って大猷院大將軍(徳川家光)に朝す。明年(慶安三・一六五〇)九月十八日命を奉して江戸を辞し、十月二十二日長崎に帰る。大將軍喜二遐境察忱一、武士醫者等をして彼の芸術を習わしむ。外科を習う者数人、田村寂貞子其一なり。これより阿蘭陀外科本朝に行われる蓋し安留曼寸その外科の権輿かな。

安留曼寸が曰く余髪を結んでより、外治を攻む。諸家を搜括して浩翰汪洋として適従して一に販する事を得ず。けだし醫の法たるや、内を治する事の難外を治する事もとも難し、内症外に及ぼす症しかも内に厚ければなり。内外合一の論、中華遺詰ウツケ至り尽せり、また贅ウヰすることをまたず、まさに憾ウツクは外治の捷徑シヨウキョウなきにより、その背紫にあたらざること、洵に滄海の遺珠なり。近代紅毛阿留曼寸偶、外科の靈術を挾んで、壺を肥の長崎市肆シヤに懸く。その體方の殊效、柳樹瘤を起す、人間世の睹る所にあらず、ほとんど龍宮より来るかと怪しむ。ごとし蒼姬の世にあらは、当に之を天宮場医に列すべし。すでに江都の台聰諸医に命じて駅を重ね書をなしこれを營中に献す。これより阿蘭陀外科本朝に行われる。余(田村外意寂貞子)また寓止り幸いに親炙を得て、興に聞き、その殺青を審にす、破割灌流の術、膏油煖煉の法と夫の外国薬品の蘊と全く備る。后を嗣ぎ、須庭資(Cornelis Stevens が考えられるが時代的に Karl Pter Stampel)阿無須與利安(Juliaen Henslingh)加須波留(Caspar Schambergen)等良医代り来りますます参究して救活の妙窮を得ることあらしむるなり。吾子予か(田村外意)門下に遊び、心を潜めて鑽研数季所あり、よって青囊中を探つて附嘱す。その人に匿して叨タウにこれを伝うることなかれ。儻能モウシクを倚ケンしかして自ら負むことあるときは、その師の罪人なり。古に曰く医は意なり。思精きときはこれを得る。それ藍よりも青きこと詎んそ他に望むことなからんや。日ヒトにかな勉めよや慎しめよや。

次に当流伝授者についてであるが、吉永升庵・寂翁子、吉永升雲・寂翁子は、中野操先生『皇国医事大年表』天和元年（一六八一）文獻に、吉永升庵、当流伝奇要撮抜書、吉永升雲、軍陣金創秘極巻（父升庵トノ合作ニシテ実ニ本邦軍陣外科書ノ嚆矢トス）とある。田村舛意、寂貞子については不詳である。林氏は、その初代は先主石川美作守乗政（信濃国小諸城主）で、元禄五年（一六九二）本道外科として越前大野藩土井氏に召出され、代々大野藩医である。さて伝承者の序次であるが、古文書的には阿留曼須↓田村舛意（寂貞子）↓吉永父子（升庵、升雲）↓林雲端（連子）となるが、あるいは田村舛意↓林雲端かもしれない。いずれにしても「子」のつくことはその相伝を物語るものと考えられる。なお連署名（本文と異筆）であるが、林雲端（連子）筆のものであり、この時点ですでに田村、吉永父子は亡くなっていたのであろうか、「寂」の字はそれを示すものであろう。

注

(一)「寛永十八辛巳年（一六四一）紅毛人が平戸より長崎に移転した折には外科医ニウリアーン・ヘンセレイン Jeurian Henselijn (or Jeuriaen Henseligh) がいた。彼は上使井上筑後守および長崎奉行（馬場三郎左衛門拓平右衛門両者）の希望により、長崎に留まりて、外科の教授をひきうくる事になった」（商館日誌、一六四一年十月二十二日の条）西洋医術伝来史

(二) 乗政助十郎、美作守、能登守、美作守、従五位下、松下和泉守乗壽が二男。母は赤城氏（新訂寛政重修譜）

(三) 林氏由緒書（大野市史藩政資料篇二）

林氏略系譜

- 一 林雲端（連子） 元文五年九月十日没 林光院雲洞居士
- 二 林雲端（宣子） 宝曆十二年九月七日没 隨心院法雲居士
- 三 林雲端（明子） 天明八年二月廿三日没 深林院雲長居士
- 四 林雲端（直子） 寛政十一年七月七日没 玉林院祥雲日涼居士
- 五 林雲仙（翼子） 安政四丁巳年三月五日没 永林院壽燕日信居士

六 林雲溪(為子) 明治二己巳年八月廿七日没 瑞林院遙雲日晴居士

参考文献

- (一) 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』全四冊、岩波書店 昭和三十五年九月二十五日
- (二) 村上直次郎訳『出島蘭館日誌』岩波書店 昭和三十二年一月三十日
- (三) 古賀十二郎『西洋医術伝来史』日新書院 昭和十七年十二月四日
- (四) 板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館 昭和三十六年四月十五日
- (五) 服部敏良『江戸時代医学史の研究』吉川弘文館 昭和五十三年十二月二十日

(福井医科大学医学部医史学)